

西日本で初めて メガソーラーをつくった生協は、 グリーンコープなんです！！

…グリーン・市民電力「神在太陽光発電所」…
9月1日から九電に売電(280世帯分)！！

“どうして発電所までつくったの？”
グリーンコープ共同体顧問・行岡良治さんに
訊きました。

Q：生協がどうして電気のことまで手を出
そうと思ったのですか？

2011年3月11日、東京電力福島原発事故が
起こった。私は「日本の大地も海や川も、食
べものも安心して口にすることができなくな
る日が来るだろう」「この狭い日本には50基
以上もの原発がある。それが事故を起さない
保障はどこにもない」「原発の安全神話は破綻
した。こんな原発事故は二度と起してはなら
ない」と真剣に受け止めた。その時に「電気
を原発に頼るのは止めよう」「政府や電力会社
に頼ってきたことを反省しよう」と提案した。
今こそ脱原発への一歩を踏み出す時だという
思いが組合員の中に湧き上がっていったよう
に思う。

グリーンコープは、安心・安全な食べもの
を自分たちの手で作り出してきた。同じよう
に電気も自分たちで作りに出せないか。それが
「原発といのちは共存できない」という思い
をカタチにすることになる。そして自分たち
で電気を作り出す一歩を踏み出すことに…。



神在太陽光発電所(糸島市)

「3.11」原発事故をきっかけに脱原発に向か
おうという気運の高まりと同時期に、GCふ
くおかの保養所・研修施設「遊学山荘」の老朽
化が浮上した。遊学山荘はグリーンコープの
創設に尽力された故兼重専務の心の拠り所
だったところ。グリーンコープにとっては大
事な場所だから。その跡地に自然エネルギー
による発電施設として風車が建てられない
かと考えた。しかし、調査すればするほど
様々な課題（風車が持つ課題、自然公園法な
ど数々の法的な課題、土地に関する問題な
ど）に直面し、その一つひとつをクリアーし
ていった先にあったのが、太陽光発電に挑戦
することと、それを作る土地としての神在自
動車学校教習所跡地が見つかった。2011年5
月から調査をスタートし、2年経った2013
年3月にまず仮設道路工事が始まるとあとは
一気に進み、8月30日竣工、9月1日から売
電が開始した。出力電力量1057kW(1.057メ
ガ)、目標の2メガには程遠いが、辛うじて1
メガを実現できたというわけ。

自然エネルギーと言われていたものはたく
さんあるが、グリーンコープは本来の自然と
いう意味では「風」「太陽」が一番自然なの
だと思う。水もあるが、水利権の問題は地域
の中にあるので、なかなか触れるのは難しい。
また遊学山荘がある糸島市は風力発電に向
かないことが判明。つまり風を活用できない
ことが分かった。その次に「太陽光発電」へ
と舵を切ったということ。

後で分かったことだが、遊学山荘がスタート
したのは「1986年4月26日」、奇しくもあ
の忌まわしいチェルノブイリ原発事故が起
こった日だった。つまり糸島市はグリーンコ
ープの脱原発を実現するに相応しい場所だ
ったと言える。



“糸島に市民発電所をつくる”。その道のりは27年前から始まっていた?!

…遊学山荘と発電所づくり。まったく関係のないこのふたつの事柄が、実は見えないところでつながっていたのです。そこにグリーンコープならではの市民発電所物語が誕生。これから物語はずっと続きます…

「グリーンコープの発電所づくりは遊学山荘がある糸島から」。そんな固い決意を持って、グリーンコープの脱原発の社会実現へと向かわせてくれたグリーンコープ共同体顧問・行岡良治さんの話をもとに以下、まとめました。

「原発が安全だ」という神話は崩れた。本当は27年前にすでに崩れたいはずなのに、今回のように自分たちで電気をつくるところまでは結実できなかった。27年という時間の流れが必要だった。

グリーンコープが設立へと向かっている1986年4月26日にチェルノブイリ原発事故が起こった。それまでも原発への不信は持ち続けていたが、決定的になったのが、チェルノブイリの事故だった。地球規模での放射能汚染に生命が脅かされる危機的状況を明確に意識し、「原発と生命（いのち）は共存できない」という方針をグリーンコープは持った。

そしてその方針を根幹に据えて、組合員は毎年取り組みを重ねてきた。この積み重ねが今につながった。原発に反対する学者からは、「福島事故が起きることは分かっていた。自分はずっと原発を失くすための行動を提起し続けてきた。原発事故が起こってしまったからは遅すぎる」との指摘も受けた。しかし、そうは思わない。行動を起こすには「起こす時」があるはず。27年前には自分たちで電気をつくる、という力をグリーンコープは持つことはできなかった。当時はグリーンコープ

として一つにまとまって連帯を構築していくことに力を傾注してきた。その中でグリーンコープは一つひとつ着実に、組合員の夢や思いをカタチにしてきた。食べものの「安心・安全」を追求することはもちろんのこと、組合員の生活に関するあらゆること、教育・文化の分野、保育園そして幼稚園にまで豊かに広がり、成熟の度合いを高めていった。

「3.11」と遊学山荘の老朽化問題、それはグリーンコープにとって不可分の出来事だったのかもしれない。電気を自分たちでつくるという大きな取り組みへ向かうきっかけになったのだから。

2011年3月11日、東日本大震災。そして、福島第一原発事故が起こった。原発の安全神話の崩壊。「日本の原発は事故を起こさない」という言葉が嘘に変わった瞬間だった。

グリーンコープは、福島原発事故を受けて改めて「原発と生命は共存できない」「今こそグリーンコープがめざしていた脱原発社会実現へと向かいたい」という方針を確認した。同時に遊学山荘の老朽化問題が浮上。その遊学山荘がスタートした日は27年前の4月26日。遠く離れた旧ソ連の原発が爆発し、世界中を放射能で汚染するという凄まじい事故が起こった日だった。あれから長い時間が経過し、日本で原発事故が起こり、そして遊学山荘は終焉を迎えた。この不思議な符合によって、グリーンコープの脱原発への決意と遊学山荘に育まれた思いが融合して大きな力を生み出し、自然エネルギーによる発電所づくりへとつながっていった。



市民発電所第一号神在太陽光発電所竣工セレモニー「グリーンコープ・糸島市長・施工者によるテープカット」(9月8日)

